

學問的方法  
西田幾多郎

佛教の全體性原理  
高楠順次郎

萬葉學先哲の苦心に就いて  
佐佐木信綱

本叢書は教學の刷新振興、並に時局の正しき認識に資する爲め「教學叢書刊行の趣旨」に基づき編輯したものである。

昭和十三年二月

教 學 局

# 學 問 的 方 法

西 田 幾 多 郎

本篇は日本諸學振興委員會哲學公開講演會(昭和十二年十月九日)に於ける京都帝國大學名譽教授文學博士西田幾多郎氏の講演要領に基づき博士の執筆を煩はしたものである。

## 學問的方法

明治以來西洋文化が輸入せられ、我々は之を學ぶことによつて東洋に於て偉大なる發展を成した。そして我々は今後學ぶべき多くのものを有ち、何處までも世界文化を吸収して發展し行かなければならない。併し我々はいつまでも唯、西洋文化を吸収し消化するのではなく、何千年來我々を<sup>はぐ</sup>孚み來つた東洋文化を背景として新しい世界的文化を創造して行かねばならぬことは云ふまでもない。久しく鎖國적이であつた日本が、明治の始に於て近代の世界的文化に接した時、之を學び之を吸収するに急ならざるを得なかつたのは已むを得ない。近來頻りに明治時代を排斥する聲の大なるを聞くが、弊もあつたであらう、併し我々は深く明治時代の意義を思はなければならぬ。今日徒らに聲を大にして明治時代を排斥するものは、明治の始に徒らに聲を大にして我國古來の文化を破壊したものの無思慮と同一である。

我々の歴史的文化を背景として新しい世界文化を創造すると云ふのは如何にして可能なるか。

時といふものは單に過去から未來へ直線的に動き行くものではない。それだけでは時の自己同一はない。時は直線的なると共に圓環的でなければならぬ。時の背後に空間的なものがないといけない。時は現在が現在自身を限定すると云ふことから成立するのである。現在が現在自身を限定すると云ふことは、過去と未來とが現在に於て結合し、(絶對に結び附かないものが結び附くが故に) 矛盾的自己同一として、作られたものから作るものへと動いて行く。そこに時といふものがあるのである。云はゞ、かゝる變じて變ぜざる矛盾的自己同一といふものを先づ歴史的精神と考へてよい。

世界歴史の舞臺から離れて何千年來孤獨的に發展した日本も、かゝる矛盾的自己同一として生々發展して來つたのである。その間幾多の矛盾や對立があつたであらう。又時代から時代へと種々なる變化があつたであらう。併し何處までも皇室を中

心として自己同一を保つて來た。そこに日本精神といふものがあつた。然るに今日の日本はもはや世界歴史の舞臺から孤立した日本ではない。我々は世界歴史の舞臺に立つて居るのである。我々の現在は世界歴史的現在であるのである。云はゞ、これまでの日本精神は比較的に直線的であつた。併しこれからは何處までも空間的とならなければならぬ。我々の歴史的精神の底から(我々の心の底から)、世界的原理が生み出されなければならぬ。皇道は世界的とならなければならぬ。今日多くの人は多くの弊害が外來思想の輸入より來ると云ふ。併し外來思想を防ぐと云ふには、特殊を以て一般に對することによつて能くし得られるのでなく、我々の心の底から世界的原理を創造せなければならぬ。

日本精神が何處までも空間的となる、世界的空間的となると云ふことは、如何なることであるか。それは何處までも學問的となることではなければならぬ、理性的となることではなければならぬ。それは何處までも感情によつて理性を排斥するも

のであつてはならない、獨斷的であつてはならない。それは嚴密なる學問的方法によつて概念的に構成せられることでなければならぬ。理論を有つと云ふことでなければならぬ。學問的方法といふのは時間的な自己を空間的鏡に映して見ることである、死して後生することである。そこには何處までも自己批評がなければならぬ。精神が學問的となるといふことは、客觀的として何人もそれを認めねばならぬと云ふことであるが、コスモポリタンとなると云ふことではない。此點が多くの人によつて誤解せられて居る。

近頃、東洋文化は教であり、西洋文化は學であるとして、東洋文化と西洋文化とが區別せられる。西洋文化が單に學であるとは云はれない。併し東洋文化、特に支那文化は教であつた、今日の學と稱すべきものはなかつた。私は決して教を輕視するものではない。併し東洋文化の根柢には西洋文化に勝るも劣らざる貴いものがあるのであるが、弱點はその學として發展せなかつたのにあると思ふのである。今日西洋文化に押されがちなのは之によるのである。此故に智育偏重といふことも、此頃

多くの人によつて標語として用ゐられるが、私は眞の智育は今後益々尊重せなければならぬと思ふ。從來は尙眞の智育といふものはなかつた。多くは單に記憶の學であつた。歴史的教育と云つても、歴史的事實の暗誦の如きも之に外ならない。

西洋文化を吸収し消化して、日本精神によつて日本獨得の文化を創造すると云ふことは、今日何人も云ふところである。そしてそれが學問的でなければならぬと云ふことも、恐らく多くの人に異論のないところであらう。併し學者の中にも眞に學問的といふことを解してゐない人もある様に思はれる。

人は往々精神といふものを使用する人間の如くに考へ、知識といふものを道具の如くに考へる。和魂漢才といふが如き語も、その様な考を表して居ると思はれる。併し學問といふものは、それ自身が精神を有つたものであるのである。自然科学の如きものでも、さうなのである。學問といふものは、我々の精神が事物の内に生きることである。斯くして始めて日本の學問といふことができる。數學の如きものでも、

イギリス的、フランス的、ドイツ的などいふのは、皆かゝる意味に於てなのである。然らざれば、それは精神と云つても、抽象的概念に過ぎない。精神科學といふ如きものでは、趣を異にするところはあるが、それも我々が歴史的客觀的事物の中に生きることでなければならぬ。それは右に云つた様に方法的でなければならぬ。

例へば、明治以來西洋の法律を取り入れた。併し西洋の法律といふものも、歴史的背景を有するものとして、異なつた歴史的發展を有する日本精神と相容れないところが出て来る。その爲、色々の問題が起きる。我々是如何なる態度を以て之に對すべきか。西洋の法律思想を取り入れない前の状態に還るといふのなら問題は無い。併しそれができないとすれば、西洋歴史の背景を有つたものとは云へ、一つの理論的體系を有する西洋的法律の體系の中へ木に竹を接いだ様に日本的習慣を挿入するか、又は超越的に外から之を否定するかと云ふ如きことしかできない。我々が眞に日本の法律といふものを組織するには、深く歴史哲學の根柢に入つて、そこから獨特の法の概念が生み出されなければならない。それは唯特殊性をあげることによつて可能なるのではなく、過去が斯くあつたと云ふの點によつて可能なるのではない。そこには理論的闘争がなければならない。

生きた精神は理論を有つたものでなければならぬ。神話の如きものでも、永遠の生命を有するものは理論的内容を藏するものでなければならぬ。單なる特殊性は何物でもない。過去に於て形成せられた形態を以て精神と考へ、之によつて新しい時代に處して行かうとするのは、却つて生々發展の精神をして死物たらしめるものである。特殊は唯特殊に對するだけである。單なる特殊は一般の特殊として考へられるものに過ぎない。創造的なものは具體的一般性を有つたものでなければならぬ。單に特殊性のみを主張するだけであつて、却つて他によつて理論づけられるならば、それは唯他の特殊となるのみである。

我々が東洋文化の深き奥底から新たな物の見方考へ方を見出し、世界歴史に新たな光を與へると云ふことは如何なることを意味するか。我々が理論的に世界に對すると

は、如何なることであるか。私はそれを今此處に哲學的に云ふことは困難であり、又一般の理解を得る所以でもないと思ふから、藝術の例によつて話して見よう。

從來、西洋の美學に於ては、美といふものをギリシヤ藝術によつて考へてゐた。即ち所謂古典的藝術が美の標準となつてゐた。それは人間中心の藝術である。リップスの感情移入説といふものの如きものが、最も能くかかる藝術を説明するのである。然るにリーグルといふ人が藝術史の研究の上から、それでは例へば幾何學的なエジプト藝術といふ如きものを説明することはできないと考へた。そこでリーグルは藝術の根源として絶對的藝術意欲といふものを考へた。それは形成的意志ともいふべきものである。而してそれには感情移入的衝動と逆に抽象作用的衝動といふものがある。一は自然の中に人間的なものを見る喜びであり、一は人間否定の方向、云はゞ解脱の方向である。私は今此處にリーグルの藝術説を詳説する暇を有たない(Riegl や Worringer のものを見られんことを望む)。唯私が云はんと欲する所は、藝術は所謂古典的藝術の一路ではなかつた。藝術成立の根源に於て尙反對の行方も

あつたと云ふことである。歐洲人は從來自分等の文化が唯一つ最も進んだ最高の文化だと考へる傾向がある。他の民族も進歩發展すれば、自分等と同じものにならねばならぬと考へる傾向がある。併し私はそれは狹量な自負であると考へる。歴史的文化の原型はもつと豊富でなければならぬ。リーグルが異なつた藝術の研究によつて更に深く廣い藝術の概念を明らかにした如く、我々は深く西洋文化の根柢に入り十分に之を把握すると共に、更に深く東洋文化の根柢に入り、その奥底に西洋文化と異なつた方向を把握することによつて、人類文化そのものの廣く深い本質を明らかにすることができるのでないかと思ふのである。それは西洋文化によつて東洋文化を否定することでもなく、東洋文化によつて西洋文化を否定することでもない。又その何れか一の中に他を包み込むことでもない。却つて從來よりは一層深い大きな根柢を見出すことによつて、兩者共に新しい光に照らされることである。私は藝術について論ずる資格のあるものではないが、形なき形を表現するとも云ふべき東洋藝術の根柢には、エジプト藝術やゴシック藝術に比して更に一層深き何ものか

あるのではないか。私はリーグルなきを惜しむ。

一〇

私が何を云はんと欲するかを一般の人に理解してもらふため、藝術の例によつて云つたが、哲學や宗教についても私は同様のことが云ひたいのである。我々は新しい論理を有たなければならぬ。

一例として現實と絶對との關係についての考について一言して見よう。東洋の大乗佛敎的な考では、絶對を單に超越的と見るのでもなく、我々の限なく進み行く極限と考へるのでもない。現實即絶對と云はれる。この語は實に誤解せられ易い。それを唯何等の努力もなく、唯普通に人の考へる如き意味に於て現在そのまゝが絶對といふ如く考へるならば、大なる誤である。又さういふ風に考へるならば、理性的なるものの單なる否定に外ならない。併し始にも云つた如く、時といふものを絶對矛盾の自己同一といふ様に考へるならば、そこに深い哲學的・宗教的意義を見出し得るであらう。近頃「中今」といふ如き語を耳にするが、(宣命にあるその語は單に

今といふ義であると云ふが)、若しさういふ語を以て日本精神を特徴づけるならば、かゝる時の考へ方によらねばならないのではなからうか。

私は嘗て少し許り書いたことがある様に(哲學の根本問題續編)、時といふものの様相によつても、種々なる文化を特徴づけ得るかと思ふ。時といふものの構造の中に、種々なる文化が配置せられ、關係せられ、統一せられ得るかと思ふのである。時が絶對矛盾の自己同一であると云ふことは、最初に云つた如く時は直線的たると共に圓環的、背理の様であるが、時が一面に空間的であると云ふことである。理智的な西洋文化は主として空間的である。支那文化は理智的ではないが、異なつた意味で尙空間的と云ふことができる(禮敎的である)。然るに日本文化は直線的と云ふことが出来る。私は日本文化をリズムカルといふ所以である。皇室中心にして情的な日本の國體といふのは、私にはリズムカルな統一の如くに思はれる。歴史といふものは兎に角時間的なものであり、假りに時の構造によつて歴史的世界の原型を考へるとすれば、それに於て種々なる方向にアクセントを有つた種々なる文化が考へ



られ、相補足することによつて世界文化を構成すると云ふことができる。

一二

私が今私の云はんと欲するところを明らかにするため、一例として云つたことは、私の一家言であり、それには色々異論もあることであらう。唯東洋文化の立場から世界文化に新しき光を與へ、世界文化に貢獻すると云ふのは、右の如き意味に於てでなければならぬと云ふのである。而してそれが又今日多くの人の口にする所謂外來思想を防ぐ所以のものでもあるのである。無論、我々が我々の文化を明らかにするには、我々の歴史的文化を何處までも研究せなければならぬ、徹底的に學問的に研究せなければならぬ。そしてそれが我々の考の基となるであらうことは云ふまでもない。併しそれによつて單に特殊性を明らかにするだけでは、今日の世界歴史の舞臺に於て生きて働く精神とはならない。我々は理論を有たなければならぬ。此處に今日の我國文教の指導精神がなければならぬと思ふ。單に明治以來外國文化輸入の弊に陥つたから、今から東洋文化を中心とすると云ふのでは單なる反動

に過ぎない。口には外國文化を排斥するのでなく、日本精神によつて世界文化を消化すると云ふも、それが如何にして可能なるかについて深く考へられてゐない。我が國に於ては、いづれの學問に於ても尙深い根本的な理論研究は微弱であると思ふ。

哲學は政治を離れたものではない。併し又政治は哲學を離れたものではない。文教は百年の事業である、政策上から考へられてはならない。それにはいつも深い大きな指導精神が基とならなければならぬと思ふ。今日は往々理論的な考へ方が、何の理解もなく、個人主義とか自由主義とかとして排斥せられる傾向がある。單に個人の自由を基として國家社會を考へるといふが如き考の排斥すべきは云ふまでもない。併し單に個人とか自由とかいふものを否定すると云ふことは、單なる壓制主義の外、何物でもない。合理主義といふことも、無造作に排斥せられる。單に合理主義を否定するのは、單なる非合理主義たるに過ぎない。個人の自由なくして創造といふものはない。生々發展の具體的な原理はそれ等のものを含んだものでなけ

ればならない（研究には自由が認められなければならない、始より結論を定めるところに研究といふものはない）。今日の思想界に於て、十八世紀末の合理主義とか個人主義とか自由主義とかいふ如き考を有するものは少いであらう。却つてマルキシズムの如きは、極端に此等の考を排斥するものなのである。終に尙一つ。日本の事物を研究するこゝが日本精神であるかの如く考へられ、日本的な物の見方考へ方に日本精神があると云ふことが忘れられて居ると思ふ。外國の事物を研究しても、そこに日本精神が現れると云ふことを忘れてはならない。そしてそれが逆に日本の事物に働くのである。單にレッテルにのみ眩せられてはならない。

昭和十三年二月二十七日印刷  
昭和十三年二月二十八日發行  
教學叢書第二輯

教 學 局

東京市芝區西芝浦三丁目二番地

印刷人 川 口 芳 太 郎

東京市芝區西芝浦三丁目二番地

印刷所 川 口 印刷所